

公民科教員による「年金」模擬授業

「高校生のみんなへ！—今考えて欲しい『長生きリスク』とセーフティーネット、そして『支え合う社会』を一」

講師：昭和音楽大学・短期大学部講師、元神奈川県立海老名高等学校教諭 梶ヶ谷 穰氏

生徒：大妻女子大学短期大学部家政科生活総合ビジネス専攻 1年

天野真佑さん、池中菜央さん、高久夏奈さん

昭和音楽大学短期大学部の梶ヶ谷と申します。よろしくお願いたします。今回は、「高校生のみんなへ！—今考えて欲しい『長生きリスク』とセーフティーネット、そして『支え合う社会』を一」ということで模擬授業を行う。

今日はウイークデーなので高校生が参加できない。大妻女子大学短期大学部家政科生活総合ビジネス専攻、今年の3月まで高校生であった3名にお越しいただいた。お名前を紹介する。天野さん、池中さん、高久さんの3人に協力してもらおう。よろしくお願する。



皆さま方には、簡単なレジュメ、一般的に高等学校、中学校、小学校で行われる授業の際に事前に配布される授業指導案・計画案をA4サイズ1枚で配布させていただいている。概ねこの順番をベースに模擬授業をさせていただく。

最初、こんな質問をつくった。「あなたはお金が好きですか」。「大好き」、「特に好きではない」。この質問から考えていこうと思う。アバウトでいいので、どちらかということ很简单に、天野さんからお願する。



○天野さん

私はお金よりも愛のほうが大切だと思う。

○梶ヶ谷氏

ありがとうございます。では、池中さん。

○池中さん

お金は大好きだ。

○高久さん

お金は大切なので好きだ。

○梶ヶ谷氏

ありがとうございます。1対2でお金が好きということですね。ほかのいろいろなアンケートも、高校生ではお金が好きというのが多いだろうと思う。

それでは2番目の質問。「あなたにとってお金と愛」。今少し言っていたが、お金を好きかどうかということと、お金と愛のどちらが大切かということである。3人とも同じ答えということによろしいか。今の3名で言うと、2人の方はお金が好きでお金が大切ということになる。実は、このことが模擬授業の最後のほうでまた関連してくるので、頭の中に入れておいていただきたい。

次にいく。私が3月まで勤務していた神奈川県立海老名高等学校で、この何年間か社会保障のアンケートを高校1年生の4月、5月に行っている。簡単なアンケートだが、この海老名高校の消費・経済研究会（ファイナンス・クラブ）というサークルがアンケートをつくり、その集計をしている。いろいろなものがあるので見ていただこうと思う。

まず、こういうアンケート。「①あなたは、現在、社会保障に興味・関心がありますか」。一番多い答えは「ウ. どちらともいえない」で145人、「オ. ほとんどない」が22人、「カ. まったくない」が23人。アンケートの回答数は353人である。「ア. とてもある」が10人、「イ. まあまあある」が84人なので、ほとんどの生徒がどちらともいえないという結果になる。

「②あなたは、社会保障に対してどのようなイメージを持っていますか。自由に回答してください」。多数意見の主旨を要約した。「老後のための年金」と「困っている人の助けになるもの」。これは、公的扶助というものを中学校の「公民」の授業でやっているの、それを基本的に社会保障のイメージとして持っているのではないかと思う。さらに、「現役世代の負担が大きい」。これは、どこまで分かっているのか分からないが、たぶんマスコミの報道などで何となく知っている生徒がこのように答えているのだと思う。

「③あなたにとって、老後とは何歳ぐらいからだと思えますか」。一番多いのは「エ. 60歳代～」で、353人中226人。しかし、「30歳代～」が2人、「40歳代～」が3人いる。あとは「100歳代～」が2人。こういうユニークな生徒もいる。

「④あなたは自分の老後の生活について（特に経済的な生活）考えることがありますか」。「ア. よく考える」が14人、「イ. 時々考える」が103人、「ウ. 考える時もある」が154人。ただ、81人は全く自分の老後（経済的な生活）について考えない。こういうアンケートの結果だった。

「⑤社会保障は老後のイメージが強いですが、子育てや病気・障害など若い時期（世代）にも役立っていることをあなたは知っていますか」。一番多いのが230人で「イ. 何となく知っている（何となく把握している）」。「ウ. 知らない」は78人。「ア. 知っている（把握

している)」は 45 人であった。老後のイメージは、あまり彼らにとっては身近ではない、直接的ではないのだろうという印象がある。

「⑥社会保障に関して、あなたの家庭で話題になることがありますか」。「ア. よくある」が 7 人。一番多いのは「ウ. ほとんどない」の 184 人。「エ. まったくない」が 102 人。社会保障について家庭で話すことはない生徒が多いと分かる。

「⑦社会保障に関して、友だち同士で話題になることがありますか」。先ほどは家庭だったが今度は友だち同士だ。「エ. まったくない」が 225 人。たぶんそうなのだろう。高校のときに友だち同士で社会保障の話なんてしないと思う。これは想定内だが、公民科の教員にとっては少し残念なことだ。

「⑧あなたは、税と社会保障の一体改革について知っていますか」。「ウ. 何も知らない」が 242 人。これも想定内だ。

「⑨上記の⑧でアとイを回答した人へ。興味・関心がありますか」。これは少しばらついて、こういう結果だった。「ウ. どちらともいえない」と「イ. まあまあある」という生徒がいる。

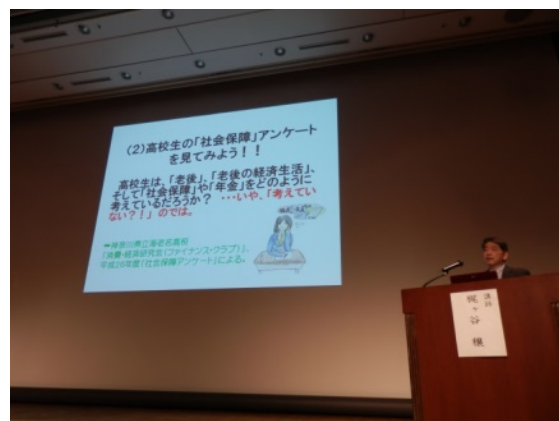
「⑩あなたは、高校生が社会保障について理解し考えることは重要だと思いますか」。「ア. とても思う」が 48 人、「イ. 少し思う」が 195 人、「ウ. どちらともいえない」が 88 人、「エ. あまり思わない」が 16 人、「オ. ほとんど思わない」が 6 人である。これを見ると、少しは理解し考えることは重要という生徒が多いことがわかる。

「⑪あなたは社会保障について、今後関心をもって学習したいと思いますか」。「イ. 少し思う」と「ウ. どちらともいえない」という生徒で 300 人に近い数になっている。

以上が、去年の 4 月から 5 月に海老名高校で行った意識調査・アンケート調査の結果になる。私が勤めていた海老名高校では、社会保障を公民の授業でやる前にこういうアンケートを行っているのでご紹介した。

ここから本論の話になる。今日の模擬授業の内容は、通常の授業では 2 時間分に該当するものになる。盛りだくさんでスピードを上げるので、少しご理解できないところもあるかもしれないが、それはお許しいただきたい。

まず、一般的な制度論であるが、授業の最初に確認しておこうと思う。社会保障制度の種類。これはあまりやり過ぎると複雑で何が何だか分からなくなるのだが、教員にとっては、社会保障はテスト問題にしやすい。用語がたくさんあるし、作問しやすい。しかし、ほとんど何をやっているのか分からない。そういうところが、教科の内容としての社会保障の特色であり、課題・問題だろうと思う。



教科書では、社会保障制度の4つの類型が一般的である。これは厚生労働省のカテゴリ一とは少し違うかもしれないが、社会保険、公的扶助、社会福祉、公衆衛生の4つである。高校のときに、皆さんやっただろうか。やっていると思う。社会保険は共助・防貧、公的扶助は生活保護・公助・救貧などとも表現を変えて説明することがある。

今回の授業のテーマは「年金」なので、その大きな柱である「年金保険」についてこれから考えていこうと思う。社会保険の中には、スライド15の①～⑤にあるように、医療保険、健康保険、年金保険、労災保険、雇用保険、介護保険とあり、すごくテストに出しやすい分野である。

そして今回は、医療保険と年金保険に焦点をあてる。①医療（健康）保険については、健康保険、国民健康保険、共済組合の保険がある。②年金保険は、主に厚生年金保険と国民年金、あとは共済年金がある。こういうものがあるということを、まずここで確認しておこうと思う。たぶん、これも高校の公民の教科書に書いてあった内容だと思う。今回の授業のメインが年金保険になるので、年金保険は赤で表示している。

まず、年金保険の前に医療（健康）保険について少し考えてみよう。年金保険も医療保険も社会保険の中の主なものであるが、高校生・短大生・大学生がけがをしたり病気になったりしたときに保険証を病院の窓口に出して医療費を払うと思うので、社会保険の中では年金よりも医療保険が身近なことだろう。そこで、問いをつくった。

スライド16は、厚生労働省の「社会保障の理念やあり方を考えるシート」から抜粋したものである。「Q. 部活動中に骨折して、入院・手術……。あなたは病院の窓口で保険証を出して3万円支払いました。もし保険証がなかったら、いくら支払うことになるでしょう？」という質問だ。これは公民の現社・政経でもやっている。たぶん皆さんも風邪をひいたときに窓口で払ったことがあるかもしれない。

答えは（ア）、（イ）、（ウ）、（エ）のどれだろうか。順番にいこうか。では、天野さん。

○天野さん

10万円。

○梶ヶ谷氏

（ウ）そうですね。答えは10万円。医療（健康）保険に入っていれば患者さんが病院の窓口で払うお金は原則3割なので、3万円払うということは全額では10万円。つまり、10万円が答えになる。そうすると、10万円の医療費が本来かかっているのだけれども、窓口では3万円。7万円は、損得で言えば得をする。このように、医療（健康）保険で患者さんは経済的にサポートしてもらっている。

さらに、こういう場合がある。10万円が3万円なら3割というのは分かるが、ほかにどういう医療保険のプラスの制度があるのか。例えば100万円の医療費がかかった。胃がんで手術と入院をして、100万円請求された。では、患者さんは自己負担の3割である30万

円の医療費を窓口で払うのかということ、そこにも書いているが、高額療養費制度というものが、実際には9万円で済む。よりサポートの度合いが厚くなっている。

このように、医療（健康）保険、国民健康保険に入っていれば、年齢によって違いはあるが、原則窓口では医療費の3割を払えばよいということになる。自分あるいは家族が保険料をきちんと払っていれば、その家族が病気やけがをしたら多額の援助をしてもらえる。損得を考えると「得だ」「よかった」と思うだろう。保険というシステムの中で医療費を払っているということだ。本来であれば自分のお金で10万円、100万円払わないといけなのだが、国民健康保険や健康保険に入っているから安く済む。まさに保険のメリットがあるわけだ。

そういうことを考えれば、少しの保険料で、リスクが発生したらものすごく大きなサポートをしてもらえる。つまり、これは君の言う「愛」である。保険料を払っていれば、予期できないリスクに対してお金がもらえる。リスクがなければ、それが誰かの医療費に回っているわけである。少ない保険料が、結局は社会のいろいろな人のリスクをカバーしている。保険の機能を、医療（健康）保険から読み取ることができる。

特に、高齢者の医療費はものすごくお金がかかる。しかし、高齢者の場合、窓口の支払いは1割である。このようなことを考えると、高齢者はものすごく保険の恩恵にあずかっていることになる。

今、保険という話をした。ここで確認しておいてほしいのは、「貯蓄」と「保険」の違いということだ。スライド18に図がある。これは、金融広報中央委員会というところで大学生用に出しているものだ。この中に、いい説明の文章がある。そこにある図を見ていただきたい。貯蓄が開始されて、どんどん貯蓄をしていく。時間がたつにつれて、貯蓄額は多くなっている。もし、この辺りの時点でリスクが起こったら、貯金をおろしてもこの額しかもらえない。貯金が貯まるまでにはものすごく時間がかかる。時間と貯蓄は三角形の関係にあるからである。

一方保険は、保険に加入して保険料を払っていると、例えば満期を迎え保険金額がおりるとともに、保険は、何かリスクが発生したときには経済的にサポートしてくれる。つまり、みんなで支払った保険料でみんなのリスクをカバーする。言わば、保険は幸せをシェアするわけだ。

このように貯蓄に対して保険は、大きな損失もすぐにカバーができるというメリット、利点がある。このような保険の機能を使って社会保険制度が存在し、今、医療保険同様に年金も実はこの保険で運用されている。ここが重要だ。

次は「年金保険」。「保険」と付いているのでまさに年金は保険なのである。貯蓄ではない。そこで、まず確認しておきたいことは、日本に住む20歳以上60歳未満の人は、全て加入する。これはこの国民年金部分。1階部分である。次は厚生年金というのがある。会社員の方などがこれに加入する。あとは公務員。2階部分である。

このように、1階部分と2階部分で老後には年金が支払われる。これも、重要なこととし

て公民の教科書に掲載されている。これは単純化してあるが、例えばスライド 19 にあるような企業年金なども厚生年金に付加して書いてある教科書もある。しかし、基本的にはこの 1 階部分と 2 階部分ということで考えれば理解しやすいと思う。

年金について、君たち高校生や大学生にとっては将来のこと、老後のことなんて関係ないと思っている人が多いかもしれない。実はそうではなくて、「学生さんにはこういう利点がある」、また「若者にはこういう利点がある」という制度がある。皆さんも来年 20 歳になり、国民年金の通知があると思います。

本来であれば、20 歳以上の人は国民年金に加入し、年金保険料を払わなければならない。けれども自分が学生で収入がないということをして市役所等に届け出れば、学生納付特例制度という納付の先送り制度がある。そういう手続きをしっかりとしていればあとで困らない。そういうメリットが学生には与えられている。この制度を使い、申請をしておけば、もし障害が残った場合などには障害基礎年金が支給される。学生だからといって年金にいい加減な態度を取るのではなく、きちんと申請すれば、リスクにも対処でき、また将来もらう年金についても特例制度によりプラスになる。

さらにまた、学生だけでなく、30 歳未満の若年者には若年者納付猶予制度がある。そういう制度も、実は使わなければいけないのだ。そうしないと、あとで無年金になったり、さまざまなトラブルが起こったりする。

このように、年金保険は国が一方的に国民に義務を課すもの。つまり、年金に入りなさい、保険料を払いなさいという義務を課すが、保険金をもらえる、また猶予制度もあることをしっかり覚えなければまずいと思う。

次も、高校の授業で年金についての一般的な説明である。高齢者 1 人を支える現役世代の人数であるが、こういうのを授業で見たらどうか。必ず授業で見ると思う。1970 年代には 8.5 人の現役世代が高齢者の面倒をみた。2010 年は 2.6 人、2050 年になると 1.2 人が 1 人の高齢者の面倒をみる。高齢化や少子化などさまざまなことが影響しながら、支える人の数・支えられる人の数がシビアになっているということだ。

スライド 21 の右上を見ると、もし社会保障がなければどうなるかという例だ。どの時点かは分からないけれども、1人が6人の高齢者をみなくてはならないという統計も出ている。高齢化が年金制度に対して大きなリスクを与えるということが分かる。そのようなことがよく教科書に書かれている。

また、スライド 22 が 1 つの重要なポイントである。年金には 2 つの方式がある。賦課方式と積み立て方式である。この図を使って、簡単に説明させてもらう。

1 番目。現行、日本は賦課方式で年金を運用している。賦課方式というのは、この図では赤になる。若い人・現役世代の人たちが働いて保険料として納付したお金を、そのときの高齢者に支給する。いわゆる仕送りをするわけである。現役の人たちのお金をまとめて高齢者に払う。これが賦課方式である。単純に言うと、この方式では現役の人たちが少なくなる一方高齢者が多ければ、若い人・現役世代の人たちは大変だ。

これに対して積み立て方式。今の若い人・現役世代の人たちが納付した保険料を国か何かでまとめておいて、その人たちが年を取って高齢者になったら年金として支給してもらうという方式である。自分のお金を年を取ってからもらうので、ここにはさほど問題があるようには思われない。ただ、この積み立て方式もメリットばかりではない。マイナス・デメリットがある。では、賦課方式のほうにはマイナスがないかということそうではなくて、積立方式同様、どちらにもデメリットはある。

こういうことはやっただろうか。賦課方式の欠点と積み立て方式の欠点について少し考えてみると、どうだろう。今、日本は賦課方式である。かつては積み立て方式だった。賦課方式の欠点と積み立て方式の欠点。それぞれ、逆のパターンになる。どうだろう、わかるだろうか。それでは池中さん、どんなことが考えられるだろうか。

○池中さん

賦課方式の場合、世代間で不公平が生じるのではないかな。

○梶ヶ谷氏

お金の不公平。つまり、現役の人が少なくて高齢者が多いから、これがどんどん進むと、より自分たちがもらうときにもらうお金が少なくなる。不公平だ。では、積み立て方式の欠点にはどういうものがあるだろうか。

○池中さん

積み立て方式のデメリットは、インフレに弱いことかと思う。

○梶ヶ谷氏

物価がどんどん上昇すると、せっかく現役世代が稼いで拠出したお金の価値がなくなっていく。そして実際に自分たちがそのお金を将来年金として給付してもらうときには、お金の価値がなくなってしまうというデメリットがある。一般に公民の授業では、賦課方式と積み立て方式のマイナスをそのように説明してきた。

では、どちらがいいかということをお授業では考えさせるわけだ。そこで、今日はそのことについて別の資料等を見ながら考えてもらおうと思う。

先月、新聞に記事で公表された厚労省の資料によると、1945年生まれの70歳の人々が負担した保険料に対してどのぐらいの年金（厚生年金）をもらうかということ、5.2倍の年金をもらっている。しかし、こちらを見ると、1995年生まれの推計は2.3倍しかもらえないということだ。今の賦課方式でいくと、1945年生まれの人たちは5.2倍もらえるのに1995年生まれの世代は2.3倍しかもらえない。年金の支給額としては多くなっているが、世代で考えるとその負担額と給付額の割合は全然違う。これを世代間格差という。これは厚生年金の場合である。会社に勤めていた人がもらう年金分、2階建の部分である。

次は、国民年金の場合だ。国民年金も同じように計算すると、1945 年生まれの 70 歳の方は払ったお金の 3.8 倍の支給額に。1995 年生まれの 20 歳の方は、1.5 倍しかない。そうすると、1945 年世代は 3.8 倍もらうけれども 1995 年世代は 1.5 倍しかもらえない。しかも、年金の賦課方式は、若い世代・現役世代の人たちが負担した保険料が高齢世代に仕送りされている。これを見ると、あなたがた若い人は素直に、どう思うだろうか。

高久さん。

○高久さん

70 歳の人たちに比べ、今の私たちはとても損している気分になる。

○梶ヶ谷氏

そうだね。相当損している。同じ国民年金制度に入っているのに、1945 年生まれの方は 3.8 倍もらえて、1995 年生まれは 1.5 倍しかもらえない。この不公平、頭にくるのは、当たり前だ。これを、年金の「世代間格差（不公平）」という。

世代ごとに保険料の拠出に対して給付である年金が何倍もらえるかということを考えるのだが、ここで大きなポイントがある。繰り返すけれども、年金は保険なのだ。自分が支払ったお金が自分に全部返ってくるのではなく、その拠出したお金である保険料は同時にほかの人のためにもなる。自分への保険としての機能とともに、払った保険料が今の高齢世代のために仕送りとして使われるということだ。確かにもらう額は少なくなるけれども、そういうことではない。保険なのだから、損をしたように見えるけれどもみんなが今の高齢者を支えているのだ。自分が高齢者になれば、その時の現役世代が支えてくれる。基本的にそういう世代間の仕送りのシステムがこの年金の制度だと考えなければならない。

年金を金融商品のように、拠出と給付が単純に何倍かと、損得を重視して、世代間の不公平があるということだけで、「今の制度はおかしい」「賦課方式から積み立て方式へ移行する」。こういうことを短絡的に考えるのは問題だろう。障害や死亡などのリスクに対する保険の機能や、みんなを支える「共助」ということで考えなければいけない。

実際に年金財政の膨張や不公平・損得など様々な課題・問題があるけれども、制度の改善のために物価スライド制やマクロ経済スライドなどが導入されている。例えばマクロ経済スライドは、高齢者世代と現役世代の人口、人数等を考えて、保険料や年金額を調整するという政策である。拠出（保険料）に対して給付（年金額）が「何倍」かとか、金融商



品のように単に「損得」ということだけに焦点をあてるのではなく、社会全体の仕組みの維持ということを目標に年金制度の改善策も採られている。基本的にはここが一番重要だ。世代間に格差があるから賦課方式はよくないと判断するのは、短絡的ではないかということだ。

次は「未納の問題」だ。国民年金の納付率 63.1%と新聞で報道された。ここで問題なのは、保険料を 40 年間納めると年額 78 万円の保険がもらえるのだが、もし未納が国民の間に広まると未納者本人も不利になるということだ。どんな理由で未納になっているかというと、「支払った保険料に相当する年金が将来もらえないから」。あるいは「年金財政は将来破綻するだろう」、などである。万が一、年金財政・国の財政が破綻するなら、その前に民間の金融機関も全部破綻しているだろう。そして「老後は何とかなる。だから年金の保険料を払わない。」というのは、利己的である。

実は、この「困ったら、国や自治体に助けてもらおう、扶助してもらおう」。つまり、いざとなったら生活保護をもらうからいい。これは、君たちと同じ高校生の中にも割と多い意見だ。将来のことだけど、高校生みんなはあまり真剣に考えていない。何とかなる。ならなかったら助けてもらおう。自分は保険料を払わない。税金も払いたくない。そして、最後に困ったら、国に扶助してもらおう。つまり、最終的に誰が負担・扶助するのかということ、きちんと保険料を支払い、そして税金も払ってきた普通の国民である。その普通の国民のお金をそのような無責任な人に使うことになる。これはモラルハザードで、また一番悪質だ。

年金も税金もそうだが、きちんと払う。学生だから全然メリットがないということではなくて、払うべきものはしっかり払う。そういうことをみんなに認識してもらうために、正しい知識と公正な判断が必要である。年金リテラシー、正しい情報の必要性もある。モラルハザード（道徳性の欠如）は駄目だ。自分が払わなくても何とかなるというのは大きな問題である。

次は少し角度を変える。今まで、年金とは何かなど少し制度的なことを話してきた。スライド 27 では、国家観や社会保障全体を考えて自分としてはどういうスタンスがいいのか。少し考えてみてほしい。縦軸（上・下）はサービスの度合で、上のほうが高サービス・高福祉、下のほうが低サービス・低福祉である。横軸（左・右）は負担の度合いで、国民として高い負担をしてもいいのか、あるいは低い負担が望ましいのかということである。

例えば高福祉・高サービスを望むが低負担がいいという人は（ア）の部分になる。（エ）の部分は、高い負担をしても低サービスでもいいという人。これはいい人だ。（ア）、（イ）、（ウ）、（エ）のどこにも該当しない（オ）の人は、中程度の負担で中程度の福祉・サービスを受けるといふ人。アバウトでいいので、自分が望ましいと思う国家観は、どこに該当するのか考えてみてほしい。それでは順番に天野さんからお願いする。

○天野さん

私は（オ）が一番いいのではないかと思います。

○梶ヶ谷氏

無難ですね。では池中さんはどうか。

○池中さん

私は（ア）が一番いい。

○梶ヶ谷氏

素直だ。高サービス・高福祉を望むけれども、負担は嫌だ、少ない方が良くということだ。高久さんはどうだろうか。

○高久さん

私も（ア）がいいと思う。

○梶ヶ谷氏

はい。ありがとうございます。ここまで、年金について積立方式がいいのか、賦課方式がいいのかなどという難しい話をしてきたが、そういうことを考える時には、自分が社会保障について、国がどうあって欲しいかという展望、基本的なイメージを持つことが重要である。国にどこまで面倒をみてもらいたいのか。国・社会に対して自分がどのぐらい納付するか、協力するか。そういうことをまず考えてほしい。

今回のこの授業では、こういうことを考えながら社会保障の制度、年金や医療保険も考えてもらいたいという趣旨を含んでいる。当然、正しい答えはない。ただ、一般的に言えば、高サービスで低負担というのはクエスチョンマークが付く。

これからはいろいろな選挙がある。候補者はいろいろなことを言う。候補者はどういうことを主張しているのか。どういう国の姿・国家像を持っているのか。こういう観点から、どの人に投票するのか考える1つの参考になるかもしれない。

ここから、少し現実的な話をする。「正しい事実」と「大切なこと」とは何か。社会保障や年金を勉強していくと、実は教える教員も、結構、先入観が働いてしまうようである。

例えば、年金や社会保障の管轄は厚生労働省だが、厚生労働省に絡むいろいろなネガティブな事件がある。「グリーンピア」問題、「消えた年金」問題、年金個人情報の流出。最近では日本年金機構の「ムダ宿舍」。このように、週刊誌や新聞には多くのネガティブ情報が溢れている。こういうネガティブ情報の影響が、教員にも学生・生徒にも及んでいる。

さらにこういう誤った情報もある。「年金財政は破綻する」。そしてまた、「生活保護費」の問題。生活保護受給者が保護費を適当に使っているという報道。受給日に飲みに行っ

たという話がよく報道されたりする。このようなマスコミによる厚生労働省等のネガティブな情報と、その報道。また、最近では週刊誌等で「年金官僚」という表現の見出しもある。私たち国民・読者にネガティブな先入観を与えている。

大人と同じく多くの高校生も、公民科の授業で年金や社会保障の勉強をする前に、何となく年金制度で「政府が言っていることはどこか胡散臭い」という先入観・イメージを持っている。賦課方式にしても、積み立て方式にしても、本論に入る前に「国でやっていることはおかしい」と思ってしまっている。こういう先入観が結構あると思う。つまり、政府は信用できない。実際に、政府は信用できないのか。先入観や世間の固定観念を排除して、積極的にいろいろな情報によって正しく考えていかなければいけない。

そして単に目先の「損」「得」だけではなく、リスクを負った人にお金を支払う。自分の拠出した保険料でその人に幸せをシェアしている。そういうことを考えるようにしてほしいと思う。最終的には自分の判断であるが、まず正しいことを知る。そして大切なことを知る。これが重要だろうと思う。年金についての正しい知識の習得、情報の収集、公正な考察と判断が必要である。つまり公正な年金についての情報をいかに得るかが重要だということだ。年金リテラシーが国民にも、そして高校生や若者にも重要である。

年金の問題を勉強していくと、年金問題は他のさまざまな社会問題にとっても関連していることに気付く。例えば、高齢者の雇用促進（定年制の延長など）。60歳の定年制よりも65歳にしたらどうだろう。5年延ばす。そうすると、5年間は給料が入るので年金の掛け金を払ってもらえるし、その間年金の受給はしない。その人にとってもプラスにもなるし、年金の財政（国）にもメリットが多く、いいのではないか。あるいは、多くの非正規労働者を正規労働者へ移行させる。非正規で働いている人には掛け金の未払いなどいろいろな問題があるので、働き方の形態を是正することなども考えられる。

あとは、安定した年金財政である。年金を払う人は少なくなってもらう人は多い。そうになると、年金財政のパイが危うくなる。安定のためには経済を右肩上がりに成長させることが重要だ。みんながうまく稼げる。そして税金を払える。年金保険料も払える。そのためには経済成長が必要だ。

少子化・人口減少も念頭に置かなければいけない。そして単身世帯を減少させることも必要だろう。一人暮らしの高齢者の増加は、少ないお金で暮らしていかなくてはならないことになる。先日の新幹線での放火事件では、少ない年金額のことをマスコミにも取り上げられた。年金だけで暮らすのは結構大変なのだ。何とかしなくていけないことも事実だ。

さらに、最近では老後破産や下流老人という言葉がマスコミで取り上げられている。聞いたことあるだろうか。年を取って、経済生活がにっちもさっちもいかないわけだ。まさに破産状態になる。下流老人というのは、『東洋経済』にもこのように取り上げられている。出来るだけ公民科の教員にはいろいろな雑誌や本を読んでほしい。こういう専門誌や、先ほどの金広委の教材・冊子など、いろいろなものを見てもらいたいと思う。

このように、年金問題は労働問題にも直結している。年金は年金だけという考え方では

なく、社会問題・貧困の問題にも取り組んでもらいたい。

最後。「正しい事実」と「大切なこと」(スライド 28)。これも少し JK を意識している。最初に、「お金好きですか」「愛ですか」と尋ねたので、それに関連させます。お金は将来の自分の年金のこと、そして「愛」とは年金制度による他者の幸せのシェアのことと言える。年金制度は長生きリスクを回避する経済的なリスクヘッジである。年金を考えるときには、正しい知識を得て、自分のためにも社会のためにも有意義な考え方を持たなければならない。

最後にこれを聞いてみる。高校生や短大生、大学生として、今回のこの授業の内容をもとに、何か自分でこんなことをしてみたいと思うことがあれば、簡単でいいので一言ずつお願いします。天野さんから。

○天野さん

今日の 50 分間のお話を伺い、今までニュースを見ても他人事のように考えている部分があったと思う。今後自分が大人になって働いていく上で、年金などの問題についても自分の意見を持ち、もっと自分から調べていかないといけないと感じた。

○梶ヶ谷氏

ありがとうございます。では、池中さん。

○池中さん

大学に入って、少し年金のことなど勉強するようになって分かってきたのだが、今まで年金は破綻するというようなネガティブなことを信じていた。年金に対する不信感もあった。きちんと勉強すればそうではないことが分かるのだと今回のお話で実感したので、もっと年金について勉強していきたいと思った。

○梶ヶ谷氏

ありがとうございます。高久さん。

○高久さん

年金はネガティブなイメージがすごくあった。今回の授業で、みんなのためにも自分のためにも年金制度は必要だと知ったので、もう少し自ら知る必要があると思った。

○梶ヶ谷氏

ありがとうございます。現場の高校の公民科教員として思ったことがある。高校の教科書ではよく、年金制度は「抜本的な改革が必要」と説明され、最終的には、今の年金制度にはさまざまな矛盾・課題・問題があるとして、結果的に積み立て方式のほうがいいのかい

はないかと記述されている。両論併記が教科書の原則であるが、「年金が保険である」「金融商品ではない」ということをあまり重要に考えない記述をしている教科書も多い。そして結論として「積み立て方式のほうが望ましいのではないか」と結論になるような。

選挙権年齢の18歳以上への引き下げにより、高校3年生には選挙権が与えられる。年金については、正しい事実と大切なこと、年金リテラシーをしっかりと把握し理解させること、そうしないと間違った候補者選びになるのではないかと思う。これからはみんなが安心できる持続性のある年金制度を支えるため、若い人がもっと積極的に議論に参加し、知恵を出そう。工夫しよう。安保法制もとても重要だけれども、老後の年金は個人にとってはより身近で重要だと思う。これからは、年金教育、特に年金リテラシーが重要になる。以上である。今日は、3人の学生さん、ありがとうございました。